

大澤 和宏



新しいテレビ塔への意気込みを語る大澤和宏氏

収益力向上を優先した運営へ

観光の魅力を創出することに関しては、アナログ放送終了前の2006年に将来の事業シミュレーションを始めました。具体的には、放送局が撤退した空きスペースを活用するため、魅力的な観光事業を展開する成長企業の誘致を図りました。その結果、当社の運営が持続可能であることが確認できました。

ただ一方で、当時は将来計画を展開する前に、緊急を要する課題として厳しい経営状況からの改善が迫られていたことも事実です。

2006年のリニューアル整備を実施する際には、愛知県、名古屋市、株主をはじめ多くの皆様からのご支援で経営の安定が



スイートルームからのレイヤード ヒサヤオオドリパークのながめ

図れるようになったことに深く感謝致しております。

大規模な全体改修工事へ

この度の全面改修は、先のリニューアルに先立ち将来経営計画の検討に着手した2003年以後、17年におよぶ取り組みとなります。

施設の再生には大規模な整備が必要となりましたが、株主からの増資や金融機関の融資、そして新たに国からの資本融資など多くの皆様のご支援をたまわり、必要な資金調達ができました。また観光の魅力創出については、高級

感のあるホテルを誘致することに尽力しました。そして夜空を彩るライティングについては、名古屋市の協力により、街のシンボルを表現する新しい輝きを市民に提供できるようにしました。

言うまでもなく、今回の大規模な全体改修工事が、本当に多くの皆様のご支援によって実現できましたことを、心から感謝申し上げます。

17年がかりの大事業

名古屋テレビ塔が観光タワーへ生まれ変わる軌跡は、当社の財政再建から始まり、一度は立ち上げたプロジェクトが頓挫するなど紆余曲折を経て積み上げてきた結果が結実したものです。

今後は、ご支援してくださった多くの方々のご期待に応えるべく、社員全員がより一層名古屋テレビ塔に誇りと責任を持って、愛知・名古屋の観光と街の賑わいづくりに貢献してまいります。

〈PROFILE〉

1939年名古屋市生まれ。昭和58年NHK名古屋中央放送局入局。退職後、NHKアイテック名古屋支社長を経て2003年から名古屋テレビ塔社長。

1000年後も生き残る、世界的な文化財へ

名古屋テレビ塔株式会社の設立目的は観光事業の推進です。テレビ塔の施設運営は、永らく放送事業者と共同運営で行って来ました。

しかし、2011年のアナログ放送終了に伴い放送局が撤退し、以後は当社による観光事業を重点とした運営となりました。

この度、名古屋テレビ塔は新たに免震機能を付加して安全性を高め、より観光に特化し魅力向上を図ったリニューアル工事を行いました。

今後の経営目標は、名古屋テレビ塔を1000年後まで残る歴史的文化財「MIRAITOWER」として活かす会社を目指していく所存です。

名古屋テレビ塔株式会社

大澤和宏

令和二年九月





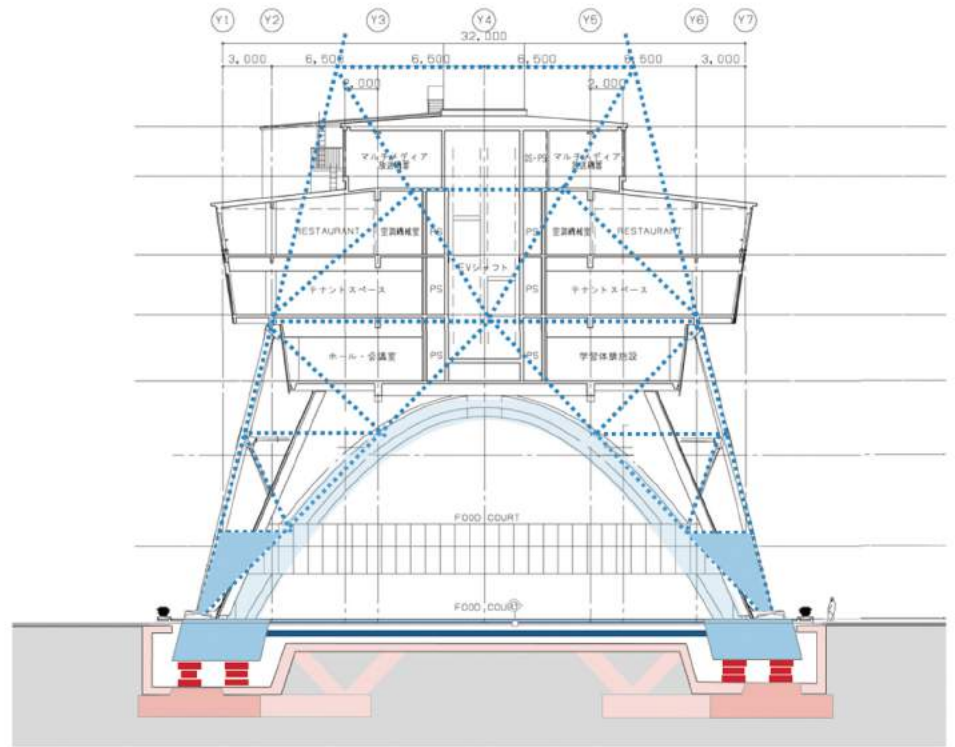
通天閣タイプの免震設計案パース

レトロフィット工法について
 免震設計については、2010年頃のスタートから2018年まで、さまざまなタイプのプランを検討してきました。
 軸となったのは、レトロフィット工法という既存建物に免震装置を設けて耐震性を改善する際に用いられる工法です。名古屋テレビ塔は震度6以上の地震に耐えられないことが診断の結果わかりました。
 そこで、テレビ塔では、足元の開放感を保ちながら塔体はそのままの姿で残すこと、予算の関係で大規模な免震層がつかれないこと、用途変更に伴い避難階段を設ける等の適法性を確保すること、この3つを大切にする方向性で進められました。

研ぎ澄まされていった免震設計
 課題は基礎下に免震装置を組み込むことと、装置を入れることで塔体四隅の柱脚が自重で外に広がろうとする力を受けスライドしてしまうため、その開きを抑えることでした。
 最初に検討した地下を総掘りして免震装置を入れる案は予算がかなり過ぎるため諦め、次に塔体を少し持ち上げて地表に入れる案や、通天閣のように免震装置を塔体に組み込む案も考えましたが、姿が大幅に変わることから、今一度原点に戻って、足元の空間を残すため地中免震案に向かいました。
 そこから、基礎まわりだけを掘削して免震装置を基礎下に組み込み、鉄塔の自重で脚が広がらないよう4本の脚をタイバー（水平に連結する鋼材）によって固定するアイデアが生まれました。それを更に進化させて、タイバーも地表浅いピットに入れて見えないように固定する、ほぼ現状の案が完成しました。



柱脚下に設置された免震装置



決定案の断面図。免震装置を組み込んだ柱脚部とそれを連結する新設のタイバー（水平の青線）が地表近くに設置されている

執行役員 設計部門プリンシパル
若林 亮
 設計部門設計部
石森 秀一

INTERVIEW 02 株式会社日建設計

日建設計と名古屋テレビ塔

免震設計を担当した日建設計のメンバーが名古屋テレビ塔と関わったのは、2006年の改修工事からになります。大澤社長がお見えになって「苦しい状況だけど、日建に力を借りたい」と言われました。
 また上司からも「先輩たちの大切な仕事だから受け継いでくれ」と言われ、仕事を越えて向き合ってきた思いがあります。



テレビ塔の模型の前に語る若林亮氏（左）と石森秀一氏（右）

変わらないものの大切さ
 実は一番大変だったのが、現場が動き出してからの変更でした。時間が迫る中、構造的に必要な手当を検討し、竹中工務店と夜遅くまで相談しながら行いました。
 ここ30年で名古屋駅前も栄も大きく変わりました。都市は30年ですいぶん変わってしまふけれど、テレビ塔だけは変わらない。そんなずっと変わらない存在があることは、街にとってとても大切なことです。
 名古屋テレビ塔には、これからもずっと変わらず残って欲しいと思っています。

＜PROFILE＞

若林 亮
 1961年石川県生まれ。1985年日建設計入社。携わった建物は「モord学園スパイラルタワーズ」「栄三丁目ビル（ラシック）」他。
石森 秀一
 1968年愛知県生まれ。2005年日建設計入社。携わった建物は「宮市医師会館」「黒笹小学校」「静岡理工科大学星陵高校」他。



柱脚とその広がりを抑える新設のタイバー

工事の要だったタイバー
 実は、工事中どうしても構造的に弱くなる期間がありました。基礎と鉄骨をカットして、建物の重量をジャッキで受けていた時です。その際に重要なサポートをしたのが、四隅の柱脚をつなぐ新設のタイバーでした。テレビ塔は地下鉄を考慮して基礎杭を打っていません。そのため、鉄塔を支える4本の柱には外に広がる力が働きます。それを緊結するのがタイバーです。あれだけ大きな鉄塔を支えてきた柱脚を地面から切り離せば、当然大きな力が働きます。それを制御するために特別な装置を取り付けてコンピュータ管理し、神経を尖らせて監視しました。緊張感のある、一番面白い作業でした。

現場での発見
 結論から言えば、工事の最中に大きな問題はありませんでした。免震工事は予定通り進み、躯体図も図面通り。計画をしっかり練っていたので問題は起きませんでした。そんな中、工事中で一番困ったのは、建屋が昔の竣工図と違う箇所が多かったことです。工事の直前までテレビ塔が営業していたため、事前に大掛かりな調査はできませんでしたが、解体して鉄骨が悪くなっていたり、古い遺物やエレベーター室下のレンガ壁など予期せぬものも色々出てきました。また建屋の床にはバサ(敷モルタル)が敷か



エレベーター室の下から現れたレンガ壁

変わっていく建築業

今から60年以上前のテレビ塔建設当時は、初めての工事で危険も多かったと思います。それも昔の話で、現在は施工の体制も危機管理も行き届いています。名古屋テレビ塔は、竹中工務店にとって、会社の関わった重要な仕事として名古屋のシンボリックな存在です。私は昨年に定年を迎え、このテレビ塔の仕事で退職となりますが、最後に面白い仕事に打ち込めたことに感謝しています。

(PROFILE)

1959年小牧市生まれ。名古屋工業大学卒業後、1982年竹中工務店入社。「ビルトン名古屋」「ミッドランドスクエア」など大型施設を多数手掛ける。



解体工事中の建屋。がらんとした塔内にはとところろ穴が空き配線などが埋められていた床(バサ)が掘り返されている

INTERVIEW 03 竹中工務店名古屋支店 作業所長 **徳野 亨**

世界初の免震工法

今回の工事の大きなテーマは「世界初の免震工法」です。建物の基礎をいじることは大変な挑戦でした。最悪、工事のさなかにテレビ塔が倒壊する恐れもありました。地震の揺れを減らす免震装置は、建物の形を変えないように地下に入れることになりました。特殊な工法でしたが事前にシミュレートして様々な事態を想定してきたため、現場が動き出して細部の設計が変わる際にも錯綜することはありませんでした。



交差アーチに沿って設けられた作業用足場



足場を組みスカート状に防塵シートが掛けられたテレビ塔

年生の時に上ったきりでしたが、仕事で関わるようになってからは、みんなに自慢しています(笑)

塗装工事の思い出

今回の改修工事は全体塗装ではありませんが、以前は名古屋まつりの夜からクリスマス前に大規模な工事を行ってきました。

工事では展望台から下に足場を組み、周りに防塵シートの養生を掛けるため、まるでテレビ塔がスカート履いたような姿になります。展望台から上は、アンテナから電波を飛ばすため足場も養生も張れません。むき出しでの作業となるため風でベンキが飛散してしまうので、夜に作業を行いました。時間はテレビ放送が終わった深夜から早朝の



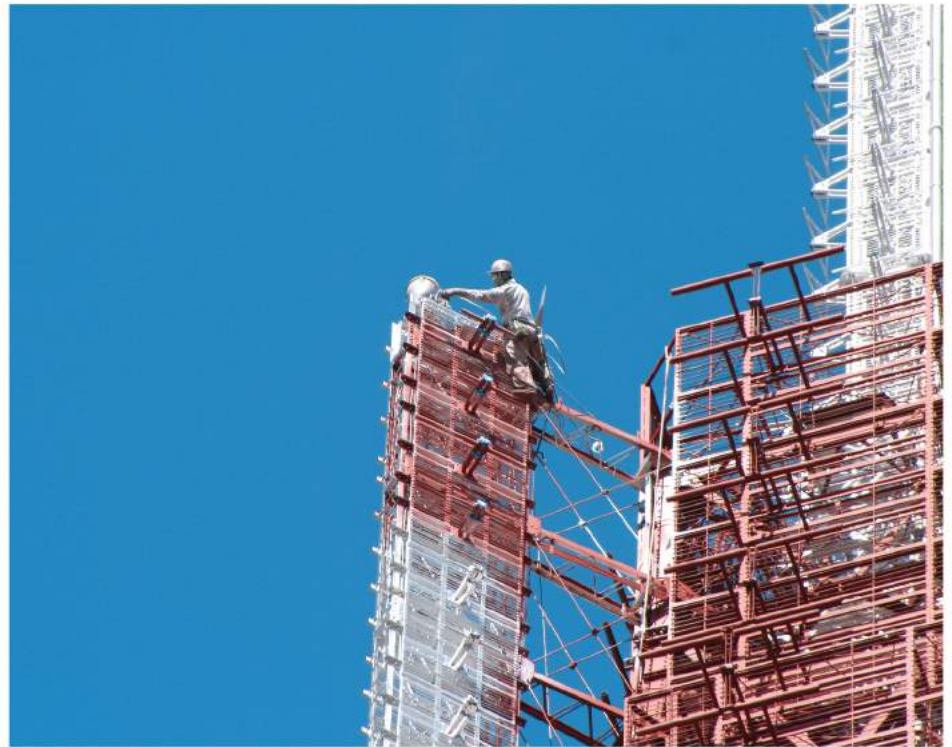
地上90mの展望台の下を塗装するようす

4時くらいまで、足場がないためハーネスで固定して手作業で行いました。

塗料は飛散対策に特製の粉状になるものを使用しています。ただ2005年の工事の時に、オアシス21のプールに粉が飛んでしまいご迷惑をおかけしました。もちろん、次の工事からはより一層注意しました。

作業は熟練の職人を6人ほど選び、手塗りのローラーで行います。上手い人は高所に慣れていますし、風向きをきちんと考慮して作業します。一番上のアンテナはパーツも繊細で慎重な作業が必要でした。

私は今も、バスで栄に向かうと必ずテレビ塔の写真を撮るのですが、いつ見てもやっぱりかっこいいですね。



テレビ塔上部のアンテナを塗装するようす。赤い部分は防錆塗装。その上にグレーとシルバーを2度上塗りする(1998年当時)

INTERVIEW 04

株式会社アイナテクノ
代表取締役社長

遠山 武志



テレビ塔への熱い思いを語る遠山武志氏

父の代からのおつきあい

アイナテクノは今年で44期を迎え、創設から名古屋テレビ塔との関係が続いています。先代の父はテレビ塔の方々にずいぶん可愛がられたと言っていました。

1985年の航空法改正の時も、テレビ塔の色が東京タワーのように赤白に変えられそうになり、当時常務だった伊神さんと運輸省大阪航空局まで事情を説明しに行きました。

私は1998年からテレビ塔の塗装工事を請け負っています。テレビ塔へは小学3

いつかまた、ピカピカのテレビ塔に

テレビ塔の色はシルバーですが、今回の塗装工事ではグレーで塗っています。前回の工事の直後はピカピカだったのが7年経って色が落ちていたので、それに合わせたからです。

今後のテレビ塔の塗装工事は、3年ごとに傷んだ箇所を錆びないように修理することが目的となります。現段階では新たに整備された公園や店舗との関係で、以前のよう全面的な工事は難しくなります。

とはいえ、いつかまたシルバーに戻したいと願っています。塗装屋としては、ピカピカに仕上げ、「やっぱり違うな」と思われたいです。

余談ですが、1998年のときに当時テレビ塔で働いていたエレベーターガールと知り合って結婚しました。展望台が「恋人の聖地」となる前のことですから、その先駆けになりますね(笑)

〈PROFILE〉

1970年名古屋生まれ。
2020-2021年度、名古屋北ロータリークラブ2760地区青少年交換委員会委員長を務める。



内藤多仲の原図をコラージュした壁面に前に、竣工当時の建材を再利用したデザインについて語る中田朝之氏

中田 朝之

名古屋テレビ塔
再生事業プロジェクト
総合プロデューサー

INTERVIEW 05

総合プロデューサーの仕事

私は2006年の改装時から名古屋テレビ塔に関わってきており、今回の全体改修工事では、事業計画からインシヤル資金調達、また工事全体の工程監理や内装設計監理まで、そのほとんどに携わってきました。そんな幅広い分野に関わっていますから、もちろん苦労も多かったですが、免震工事については、現状の姿を残したいという意思を明確に持って日建設計と打合せを重ね、事業収支計画内で収まる範囲を探る微妙な調整にまで目を通しました。



黒く塗られた鉄骨が斜めに走るホテルの内装

内装デザインの仕事

デザインに関しては、共有部とホテルのスイートを担当しました。また、それ以外のテナントの内装監理についても、私の会社が行いました。

共有部の壁面にはテレビ塔の設計者である内藤多仲の原図をコラージュしたデザインを施し、さまざまなところで昭和29年の竣工当時の鉄骨やテラゾーの石、防火扉などが陳列されています。66年前のものを表示することで、名古屋テレビ塔の歴史感を演出しています。

一方で、ライトアップはまったく変わりました。それまでのオレンジ色のナトリウムライトは1670万色のLEDになり、南側エレベーターシャフトに設置されるLEDサインネーじは約3倍の画像解像度になったことでより詳細な演出が可能になりました。

また展望台も大きく変わりました。腰壁と天井一面をダークミラーで覆うことで広がり表現



間仕切りに再利用された鉄製の旧防火扉

しました。夜間には360.全方向に映像を映し出すこともできます。このプロジェクトで映し出された映像と実際の夜景が融合することで、展望台は幻想的で劇的な空間になります。



天井一面と腰壁をダークミラーで覆った展望台

新しいコンテンツをプロデュース

集客についてもかなり期待が持てると思っています。

「ザ・タワーホテル・ナゴヤ」は、オープン前からSLH(スモールラグジュアリーホテル)の称号を受けました。これは高質のサービスはもちろん、世界で唯一タワーの中にホテルがあるということが評価につながっています。

また「グリシーヌ」は、系列店が高い評価を

受けているフレンチレストランで、ミシュランの獲得を狙っています。

それ以外にも、現実世界と仮想世界を融合させたXR(VR+AR)の施設を用意し、最先端の体験型ゲームを楽しむことができます。

これら新しいコンテンツを常にプロデュースし、さらなる創造につながる環境を創り出したいと思っています。

MIRAITOWER としての成長を願って

私は、名古屋テレビ塔が一番素敵なタワーだと思っています。今後も外観だけはキープして欲しいです。

その一方で、コンテンツは生まれ変わり続けて欲しいと思っています。それは来塔する方々に育てられることを意味します。テレビ塔がそのような、みんなで成長させていく「新しい名古屋のシンボル」となることを願っています。

(PROFILE)

1958年名古屋生まれ。名古屋工業大学卒。建築空間意匠デザインおよび事業プロデュースを手掛ける。「東山公園第1期事業」「金シャチ橋丁」をはじめ、日本全国で多数の商業施設プロジェクトに携わっている。